



狂四郎

柴田 錬三郎

光風社版



昭和三十八年一月三十日 印刷
昭和三十八年二月五日 発行

定価 三〇〇円

著者 柴田 鍊三郎
発行者 豊島 清史
印刷者 新倉 誠一

発行所 株式会社 光風社

東京都千代田区神田錦町三ノ一四
電話東京(二九一)〇二三八番
振替東京五六五二六番

落丁・乱丁は御取替いたします。

目次

花嫁首

五

消えた兇器

三九

悪女仇討

七一

狐と僧と浪人

一〇三

武蔵・弁慶・狂四郎

一六九

装
幀

佐
多
芳
郎

御存じ眠狂四郎

花
嫁
首

市には、正月の静かな賑いがあった。

初荷の車の上の獅子舞いの囃しや、鳥追いの三味線の音や、三河万歳の鼓の音や、そして子供たちが打ち合う羽子板の音など……。

眠狂四郎は、不忍池に沿うた池之端仲町の湯屋の二階の掃出縁の手すりに凭りかかって、青空に舞う紙鳶を、見上げていた。

町方で、子供の往来遊びは、珍しくないことだが、紙鳶あげだけは、年に一度、正月にだけ許されていて、男の子たちの最上の愉しみであった。

田舎とちがって、寸地をあまさぬ市中なので、平常は、紙鳶あげは、許されていなかった。

ただ、立春の季には、空を仰ぐのを養生のひとつとかぞえていたので、大人たちも、通行をさまたげる遊びに、文句を言わなかったのである。高位の士たちも、正月だけは、紙

鳶あげに夢中になっている男の子たちの脇を、よけて通ってくれた。

——おれには、紙鳶をあげる愉しみもなかったな。

淋しい孤独な少年の日をかえりみて、狂四郎は、胸のうちで、呟いた。

母は、陰惨な、姦淫の子である狂四郎を、素姓正しく生れた子以上に、きびしく、さむらいとして、躰しんけようとしたのであった。

母と子と、二人きりの、沈黙裡の屠蘇とそ汲みが終ると、狂四郎に課せられたのは、吉書かきぞめと弓馬槍劍の芸と、耳朶のひきちぎれるような乗馬初めであった。

わずか五歳の正月から、その躰は、はじめられ、母が逝くまで——十四歳まで、つづけられたのであった。弓馬槍劍の諸芸初めは、もとより、士家の子弟たちの正月行事であったが、これは形式化しているだけで、汗を流すようなことはなかった。狂四郎の母は、しかし、わが子に、必死の試みを、つよく命じたのであった。

したがって、狂四郎の脳裡には、正月は苦痛なものという記憶しかないのである。

いまは、正月という儀式とは全く無縁な、異端無頼の徒となって、こうして無為の時間

を、湯屋の二階ですごしている。

家もなく、妻子もなく、そして友もない身であった。

中空で舞う紙鳶を、おのが身になぞらえて見ている狂四郎であった。

「旦那——」

二階番頭が、客が履物を置く下足段から、顔をのぞけた。

「お玉ヶ池の親分が、旦那をたずねておいでですぜ」

佐兵衛という老いた御用ききとは、つきあいが久しい。

狂四郎は、上つて来た佐兵衛の表情が、いつになく、ひどく緊張したものであるのを見て、

——浮世は、目出度いことばかりではないらしい。

と、思った。

「お願いがございます」

佐兵衛が、年始の祝辞をはずして、そう云ったのは、起った事件に心がとらわれていて、

祝辞を忘れたわけではなかった。そういう儀礼は、狂四郎には、不必要だと心得ていたからである。

西丸老中水野越前守の側頭役・武部仙十郎を除いては、狂四郎という人物を、いちばんよく知っている老人であった。それだけに、狂四郎に、頭を下げに来るのは、よくよく、手にあまる大きな事件に相違なかった。

「春から縁起がわるいようだな」

「左様で——。もう四十年も御用をつとめて居りますが、正月早々、こんな途方もない出来事にぶつかったのは、はじめてでございます」

「どうした？」

「昨夜、婚礼がございました。元旦の婚礼は、滅多にない例でございますが、その^間で、花嫁御寮が殺されて居りました。それも、ただの殺されかたではなく、首を斬られて、その首が失くなって居ったのでございます」

「……」

「ご存じ寄りかと存じますが、西丸御老中様の遠縁にあたるお方で、奥祐筆を勤めておいでの、加倉井耀左衛門様のお屋敷で耀左衛門様の御次男と、蔵前の料亭『江戸金』の一人娘とが、婚礼の式をお挙げになったのでございます」

一一

この時代は、士家はもとより、民間においても、婚礼の儀式は、大変なものであった。五代將軍の頃、水島卜也という者がいて、小笠原の家伝を得たと称し、種々の説を捏造して教えたのが、いつの間にか、礼法をもって家を立てる者たちの間に浸透して、士家民間ともに小笠原流に順したがわざるを得ないようになっていたのである。

花嫁の輿を逆さに昇ぎ出すこと、その輿が婿の家に入る時、門内に、うちあわせの餅といて、還暦の老人夫婦が餅を搗くこと、召替えの輿には、筒子、這子、犬張子などを載せて、その戸を開いて、衆民に観せること、あらたにえんおう鴛鴦の衾しとね、長枕などを作ること、かつら女め、とどわけ（悪魔払い）という女を花嫁に随伴すること、婿から舅に贈る紅白の餅

は五百八十七個であること等々。

昨夜――。

加倉井耀左衛門邸では、三河譜代の名門らしく、最も物々しく、小笠原流の婚礼を挙行したのであった。

正月元旦に、挙行したのも、古代の曆に従ったところ、大吉日と出たからであった。

(普通、嫁入り月は、正月、五月、九月を忌み、三月は去られ月、八月は離れ月として取らぬのである)

合きん呑の式をおわり、色直しの座もすませて、婿と新婦は、寢所に入って、床盃を交して褥に入った。

しかし、宴は、つづけられていた。宴が長引くのをその家の誇りとするならわしであったので、招かれた者は早く帰るのを非礼としたのである。その広間から、酔いつぶれていた最後の客が、目ざめて立ち上ったのは、そろそろ夜も明けかかった頃合であった。

仲人夫婦には、まだ、勤めがのこっていた、

寢所に入って行き、婿と新婦を起して、夫婦の契りを、ぶじにむすび了えたかどうか、たしかめることであつた。

仲人役は、書院番の長老・四つ木喜左衛門という老人であつた。

この問いは、屏風をへだててなされるのであつたが、四つ木喜左衛門は、古稀を迎えて、耳も遠くなつていたし、氣ぜわしくなつていたので、つかつかと褥のそばまで、ふみ込んだ。

一瞥して、仰天した。

老人が見出したのは、美しい新婦の寝顔のかわりに、人相凶悪な男の首だったのである。のみならず、それは、鉛色と化した死首であつた。

婿は、その横で、口を半開きにして、熟睡していた。

四つ木喜左衛門は、あまりの奇怪な光景に、しばし、瞠目したまま、棒立ちになつていたが、急に、憤然となつて、その死首を、足蹴にした。

すると。

死首は、ごろごろと、畳へころがり落ちたではないか。すでに、胴から離れていたのがある。

二度愕然となった喜左衛門は、掛具を、はねのけてみた。

そこには――。

首を喪^{うしな}った真白い、豊かな、女の裸身が、純白の二布^{こしき}をまとっただけで、横たわっていた。新婦のものにまぎれもなかった。

すなわち。

新婦は首を刎ねられ、代りに、どこかのいやしい男の首を継ぎ合せられていたのである。

まさしく、奇怪な事件であった。

直ちに、町奉行所に通報されずに、佐兵衛が、そつと呼ばれたのは、世間へきこえるのをはばかって、極秘裡に、解決しようとする仲人役の四つ木喜左衛門のはからいであった。

喜左衛門と佐兵衛は、ふるい知己であった。

佐兵衛は、しかし、当惑した。岡っ引は、武家屋敷の生活ぶりについて、知識が乏しか